

明^あ
日^す
香^か
の

康
夫

角
川
書
店

あすか
明日香の皇子

昭和五十九年十二月二十日 初版発行

著者 内田 康夫

発行者 角川 春樹

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見二丁目三番
電話 (03) 5561 9521 (編集部)
(03) 5561 8322 (営業部)

印刷所 旭印刷株式会社

製本所 株式会社 宮田製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたしませう

©Yasuo Uchida 1984, Printed in Japan

ISBN4-04-872393-6 C0093

目次

プロローグ	五
第一章 失蹤 しつそう	一七
第二章 「エイブルック」の秘密	六四
第三章 動きだした渦	一〇〇
第四章 武蔵野環状線	一四九
第五章 もうひとつの飛鳥	一九五
第六章 救出	二三三
第七章 大和しうるはし	二五五
エピローグ	二九五
あとがき	二九八

装丁
前田利昌

明^あ
日^す
香^か
の
皇^み
子^こ

プロローグ

昭和十六年十二月三十一日——陸軍中将今村均と彼の幕僚——参謀長と八名の参謀および副官——を乗せた旅客機は福岡県の太刀洗飛行場を離陸、サイゴンへ向けて東シナ海を西進していた。今村は第十六軍を率いて、南太平洋の最前線・ジャワ島を攻略せよとの命を受けている。各地に展開中の三個師団と混成旅団が、今村の指揮下に入るべく、すでにマニラに集結しつつあった。この旧式の双発機には、その中枢である司令部のスタッフが全員、身を委ねていたのだ。

離陸した頃は穏やかだった天気だが、しだいに怪しくなってきた。やがて、強い季節風が吹きだした。しかも、左エンジンが急激に悪くなった。はげしいノッキングで、チャチな機体はガクンガクンと揺れ、高度が不規則に上下する。素人にも故障であることは分かった。参謀連中はたがい不安そうなる目を見かわし、「どうしたんだ？」と囁き合っている。

副官の紀乃本大尉は不安定な機内を、よろけるようにして、前方の操縦室に入った。見ると、機長が操縦桿を握り、機関士がなにやら、計器類を点検したり、器具を操作したりして、大童のありさまだ。

「大丈夫かね」

声をかけると、振り返った二人の目が血走っている。ものを言う余裕もないらしく、すぐに作業に没頭した。

「どうなんだ！」

紀乃本は業をにやして、怒鳴った。

「見れば分かるでしょう、一生懸命やっているとですよ」

機長が怒鳴り返す。どうやらスロットルがうまく作動してないらしい。エンジンは快調になったかと思うと、すぐにバタバタという不愉快な音を立てて、とたんに速度が鈍った。

「機長、船です！」

機関士が指先を下に向けて叫んだ。機の左下方に雲の切れ目があつて、そこから、同一方向に進む貨物船が見えた。海上は時化しけているらしく、白波が立っていた。紀乃本は、飛行機が意外に低く飛んでいるのに気付いて、ゾツとした。

「よし、旋回しよう」

機長は宣言するように言った。

「降りるのですか？」

機関士は青い顔をした。

「場合によっては、そうするしかないだろう」

ちよつと操縦を替わってくれ、と、機長は席を離れ、客室へ出ていった。紀乃本も、押し出されるように操縦室を出た。飛行機は早くも旋回を始めたのか、傾きがきつくなつて、物に撞ぶまらなと立っていらなくなつた。

「たいへん申し訳ありませんが、ごらんのように発動機が不調であります。現在、本機の下に貨物船が航行中でありますので、その上空を旋回しつつ、なお修理に努力しますが、万一、どうしても回復する見込がない場合には、貨物船付近に着水するかもしれません。あらかじめご承知置き……」

機長が言い終わらないうちに、参謀長が「馬鹿を言うな！」と怒鳴った。

「貴様、われわれをなんだと思つとるんだ。今村閣下以下、第十六軍の司令部を全滅させるつもりか。今回の飛行は一週間も前から分かつたことではないか。発動機が不調でございますなどと、世迷いごとはなはだしい」

「お怒りはごもっともですが、事態は切迫しておりますので、とにかく救命胴衣をご着用ください」

「この荒海に不時着して、助かる見込があると思つとるのか」

「最善を尽すのみであります」

機長相手に憤慨してみても、いまだどうにもなるものではない。参謀連中も諦めて、救命胴衣を着けはじめた。紀乃本は今村司令官に近付いて、胴衣を着けさせようとした。それまで眠っているようにさえ見えた今村が、ふと目を開け、紀乃本の手を制して言った。

「機長、北へ向かいなさい」

「は？……」

機長ばかりか、全員の目が今村に集中した。

「北へ……、ですか？」

「そうだよ、北へ行けば助かる」

「北と仰言いますと、どちらへ？」

「そんなことはきみの方が詳しいだろう。わたしはただ、北へ行けと言っている。それしか、分かるんです」

「しかし、それですと、風に逆行するわけでして、つまり、吹雪に突っ込むことになります」

「大丈夫、飛べます」

「しかし……」

「問答をしておるひまはない、これは命令です」

今村の穏やかな目が、異様な光を帯びた。機長はその目に射すくめられたように、蹣跚^{そうそう}として操縦室に戻ると、すでに海面近くまで降下していた飛行機をたて直し、機首を北に向けた。今村以外の者はすべて、窓の下をみるみる遠ざかる貨物船を、名残り惜しうに見返った。

機長が言ったとおり、飛行機はまもなく、猛烈な吹雪の中に突っ込んだ。機体はいまにも空中分解しそうに揺れ、エンジンは相変わらず不調だ。頼りの貨物船はおろか、海面は雲に覆われ、小舟ひとつ見えない。誰もが絶望感を抱き、しぜん、会話が跡絶^{とだ}えた。軍人である以上、死はもとより覚悟の上だとしても、こういうところで犬死同様の死に方をするのではやりきれない。口にこそ出さないが、今村司令官のゴリ押しを恨めしいと思う者が多かったに違いない。

今の今村はしかし、平然と瞑黙^{めいもく}し、口許には微笑さえ浮かべている。その姿を見ると、紀乃本はなんだか信じてもいいような気になってきた。このオヤジさんとなら、たとえ死んでも諦めが付くと思った。

と、操縦室から機関士が顔を出して、「陸地が見えます！」と叫んだ。

「たぶん済州島だと思われます。海軍航空隊の基地がありますので、もう心配ありません」

「おうっ……」と、参謀たちがどよめいた。「いのち拾いしたなあ」「やはり、今村閣下のご指示が正しかったのですな」「どうも恐れ入りました」

口々に言い、笑い声がおこった。

「それにしても、閣下はどうしてあの時点で、正確なご判断ができたのですか？」

参謀長が真顔に返って、訊いた。紀乃本もそのことはぜひ知りたかったので、今村がどういふ答えを言うか、固唾（かたつゆ）を飲む思いで見守った。

紀乃本は、今回の第十六軍編成に伴う人事によって、今村司令官付きの副官に任命されたばかりである。したがって、それまで、今村についての知識はほとんど皆無にひとしかった。そして、ここ二か月近くの間、それこそ寝食を共にするほどの付き合いをしていながら、ぼうようとした風貌（ふうぼう）そのままだに、どこと云うて掴みどころのない人物——という、第一印象の枠から一步も出ていない。それどころか、正直なことを言えば、この穏やかで、もの静かな將軍が、平時ならともかく、実戦に出て十分な働きのできる名將であるとは、到底、信じられないような氣持さえするのだ。

その今村が緊急に際して、少しも慌てず、専門職である機長に対して的確な指示を与え、危機を乗り越えた。態度も口調も、ごくさりげなかったけれど、そう命じるについては、それなりの、判断の根拠（こんきょ）といったものがあつて、それこそが今村の真価（しんか）を示すものであるに違いない——と、紀乃本は思ったのだ。

だが、今村は参謀長の質問にニヤリとして、首を横に振った。

「わしはただ、海が恐かっただけです。あんなところに不時着したら、助かりっこない。どうせ助からないものなら、少しでも陸地に近い方がありがたいと思っただけです」

「ははあ……」と、参謀長は不得要領（うづやう）な肯き方をした。彼もまた、今村に対して「凡庸（ぼんやう）な司令官」というイメージを抱いている一人だったから、今村のとぼけたような答えを、そのまま鵜呑（うどみ）みにした。しかし、紀乃本の疑問は納まらなかった。紀乃本は機長を叱咤（しつた）した時の、今村の恐ろしい眸（ひとみ）の輝きを見ている。（あれはただごとではない——）という確信があつた。今村はまぎれもなく、確固とした信念のもとに、「北へ……」と言つたのだ。

機は無事に済州島の基地に着陸した。司令塔から飛び出してきた海軍の管制官が、「よくこんな吹雪の中を……」と驚いていた。それよりも、この飛行に驚嘆したのは、ほかならぬ機長本人だった。

「いまだに信じられない気持です。まさに天佑というものでしょう」

機長はそう述懐して、いまさらのように首をすくめた。

「あの時点では、どう頑張ったところで、五分とは保つまいと覚悟を決めていたのです。それが、まともに吹雪に向かうという悪条件が重なったにもかかわらず、一時間近い飛行に耐えることができたのですからねえ。これはもう、天佑としか考えられません」

天佑——という言葉を、機長はしきりに使った。紀乃本も同じ想いだった。たしかに、この奇蹟的な飛行には天佑が幸いしたのだと思う。しかし、それはそれとして、その天佑をもたらししたのは、今村司令官の英断であることも事実だ。それすらも天佑というのなら、今村司令官は神意を具現したことになる。

（神がかり——）

紀乃本はなにか本気で、そんなことを思った。

いまでこそ笑い話にしかないが、僅か四十年あまり前の当時は、国民の多くが真剣に、「日本は神国なり」と信じていた。日本は神の国であり、神様が護ってくれるのだから、戦争に負けるはずがない——、という信念があった。開戦を布告する詔書の冒頭にも、「天佑を保有し……」とある。

万世一系の皇祖皇宗は現人神であり、国民はみな天皇の赤子である。したがって、わが大日本帝国に仇なす国は、すなわち神に弓引く逆賊であり、当然、滅亡の運命にあるのである——。こう信じたからこそ、あの絶望的な戦争を肯定し、トコトン打ちのめされる最後の最後まで戦い抜いたのだ。敗色濃厚になった時点でも、「なめに、そのうちにきつと神風が吹いてくれるさ」と、本気で思い込んで

いた。嘘のような話だが、これは事実なのだ。

紀乃本が奇蹟を目のあたりにして、今村が神がかり的な存在に思えたのは、だから、少しも不思議ではない。しかも、紀乃本は、機長を睨んだ時の、今村の異様な眸の輝きを見ている。それは日頃の今村とはまるで異質のものだった。何か得体の知れない力が今村の双眸からほとばしり出るのを見、背中にゾクッとするものを感じた記憶がある。事実、その眸に会って、機長は一言の反論もできずに、命令に従ったのだ。相手がたとえ司令官であれ、機上にあっては機長こそが権威者だ。そう教育されているはずの機長が、まるで何かに脅えるかのように引き退がったのは、今村の眸に圧倒されたためとしか考えられない。

紀乃本はひそかに機長に訊ねてみた。

「今村閣下があなたに命令された時、閣下の目が異様に輝いたように見えたのだが、何か感じませんでしたか？」

「えっ……」

機長はギョッとして、紀乃本の顔を見た。

「あなたも気が付いておられたのですか。じつは、あの瞬間、私はまるで催眠術にかかったみたい、まったく抵抗する気力が失せてしまったのです。いや、そればかりではありません。正直なことを言いますと、あのあと、どうやって機を立て直し、無事に済州島まで飛ぶことができたか、ほとんど憶えていないのです」

（やはり——）と、紀乃本は自分の見たものが幻覚でなかったことを知って満足し、それと同時に、今村に対する関心が高まった。

代替機は明日の午後に到着する手配が調ったものの、その晩は、基地近くにある日本人が経営する

旅館で、思わぬ一夜を過すことになった。夕食の小宴の席上、機長はすっかり恐縮して、「旅客」たちの前でペコペコ頭を下げて謝ったが、今村はニコニコ顔で、かえって機長の労苦をねぎらった。

「明日は新年だ。元旦の旅立ちとは、むしろ、縁起がいいじゃないですか」

そう言う今村の目からは、あの異様な光は消え失せていた。しかし、紀乃本はどうしても疑問を確かめずにはいられなかった。その夜、紀乃本は今村の部屋を出る時、思いきって訊いてみた。

「閣下にお尋ねしたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

「ん？ 何かね？」

今村は丹前に着替えて、日記を付けていた。

「今日、機長に方向転換をお命じになった際、閣下にはよほどのご確信があるやに推察したのでありますが、いかがでしょうか」

「ほう、なぜそう思うのかな」

「はあ、閣下のお目の輝きを拝見して、そう思ったのであります」

今村は眼鏡を取り、ゆっくりと紀乃本を振り向いた。そうして、しばらくの間、ほとんど動かずに、紀乃本の顔を眺めてから、「ふふ」と笑った。

「きみは紀一族の末裔しんぎだったね」

「はっ？……」と、今度は紀乃本が問い返す視線を今村に送った。

「ご存じでありましたか」

「うん、知っておる」

今村は軽く肯いた。

「わしよりも、本来は、むしろきみの方が今日の危急を救うべき役柄にあったのだね」

「それは、どういう意味でしょうか？」

「なんだ、知らんのか。きみの先祖がこの海を渡ったじゃないか」

「？……」

「その様子だと、本当に知らんようだな。千百年ばかり前、紀僧正きそうじやうの乗った船が東シナ海で遭難し、僧正と弟子の一人だけが助かったという話だ」

「紀僧正……、でありますか……」

「驚いたなあ、じゃあ、きみは紀僧正のことも知らんのか。真済といい、空海——弘法大師の高弟で、通称『紀僧正』と呼ばれていたのだが、そんなことも知らんようでは、ご先祖様の罰が当たるぞ」

今村はひとしきり、愉快そうに笑ってから、

「きみは大和やまとの出身ではないのか？」

と訊いた。

「いえ、自分は東京の産ですが、祖父は奈良県の出身だと聴いております」

「そうだろうね。戦争が終わって内地へ還ったら、ぜひ大和の柿本村かきもとを訪ねるといい。そこには影現寺という、いにしえに紀僧正がいた寺がある。僧正の像が安置されているのだが、その顔はきみにそっくりだよ」

「はあ……」

自分の無知を恥じながら、紀乃本はふと、今村の言ったことが気になった。

「あの、戦争は終わるのでありますか？」

「ん？……」

今村はまずいことを言った——というように、苦笑した。

「そりゃ、終わらない戦争なんかがあるものか」

「容易ならぬ相手だと思えますが、あとどれくらいで勝てるのでしょうか」

「その問いには答えられんよ。ただ、日本は悠久である、とだけ言っておこう」

それを日本の勝利を保証した言葉として、紀乃本は受け取った。今村はそういう紀乃本の呑気（のんき）そうな顔が気になったのか、さらにつけ加えて、言った。

「長い苦難の道を辿（たづ）らなければならんが、その先には、空前ともいべき繁栄が待っている。そこまで見とどけてから、わしは死ぬことになるだろう。ただし、それから先のことは、わしの手の及ばぬところだ。次の者が日本を救うかどうか、わしにも予測がつかない。繁栄は墮落を生み、やがて日本民族の滅亡（めつ）に繋（つな）がるかもしれない」

紀乃本はあつけにとられて、氣遣（きよ）わしげに眉（まゆ）を曇（くも）らせる今村の顔に見入った。「長い苦難の道」だの「空前の繁栄」だのと、予言めいたことを言うのはどういう意味なのか？「次の者」とはいったい誰のことを指すのか？

それを問い質（たず）そうとした時、今村の方から言い出した。

「そうだ、いまの内にきみに頼（たの）んでおこう。わしに万一ということがあるいともかぎらんからね。いかね、戦争が終わって、わしが死んだら、大和の地へ行きたまえ。葛城（かつらぎ）の二上山（ふたがみやま）にある大津皇子（おほつのみこ）の墓を訪ねるのだ。もしかすると、そこで『次の者』に会えるかもしれない。もし会うことができたらしきみが彼の力になるべき宿命にあると思わなければならない。いま、わしのためにいてくれるようにだ」

それだけ言うと、今村將軍は元のように日記に向かい、それ以上の紀乃本の質問を拒否する姿勢を